自ら学び，考え，そして表現する ディベート学習への取り組み

長崎県西彼杵郡長与町立長与第二中学校
大塚 潤

Class to Class Letter
NEW CROWN
授業通信

■はじめに

これからの学校教育は「ゆとり」の中で自ら考える力などの「生きる力」の育成を基本としている。本紙の題にある「自ら学び，自ら考え，そして表現する」ことは，教師による知識の押しつけではなく，生徒の個性や学ぶ力を尊重し，実体験を大切にする教育への転換によって育成されるものであり，このことが英語学習における実践的コミュニケーション能力の育成につながると考えている。

そこで，実践的コミュニケーション能力を育成する１つの手段として「ディベート」を取り上げた。

■ディベートとは

「ディベート」は，一言でいうと「議論のスポーツ」「討論試合」である。特定のテーマを決め，肯定側と否定側に別れて，決められたルールの下で議論しあい，最後に，説得力で勝った側を判定するというものだ。社会的に是非が問題になっているテーマなどを取りあげ，議論によってスポーツのような試合（ゲーム）を行って，表現力・判断力・思考力を深めようというのがディベートである。

体育大会や文化祭などで生徒に議論を呼びかけても，議論がほとんどないままに多数決をしてしまうというのが生徒たちの従前の現状である。このことから，授業にディベートを取り入れることについては不安を感じて，すぐには踏み切ることができなかった。

しかし「このままでは」という危機感からまずは日本語で，社会で話題になっているテーマでディベートを行ってみた。すると，大半の生徒が仲間の議論を熱心に聞き，少なくない生徒が「もっとディベートをやろう」と言いだした。やはり大半の生徒は「討論が好き」だということがわかり，俄然やる気がわいてきた。

■ディベートの目的は

学校での教育は一般に「答えがある問題」を扱う。その結果，世の中の見え方が「答えのある問題」中心になる。あるいは社会を「答えのある問題」として見てしまいがちである。なかなか「自ら課題を見付け，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決」しようなどとならない。なぜなら与えられた問題はどれもこれも既に解決済みの「答えのある問題」ばかりだからである。

しかし，ディベートでは「答えのない問題」を扱う。その結果，世の中の見え方が「答えのない問題」中心に見えてくる。あるいは社会を「答えのない問題」として見るようになってくる。つまり社会の問題は議論及び意志決定によって前に進めていかない限り積み残されたままだと感じるようになる。ディベートの体験前は「何が正しいか」「誰が正しいか」と問題の答えを外部に探そうという態度が一般的であった。しかしディベート体験を重ねていくと「今問題になっていることは何か」「それについてみんなはどんな考え方をしているのか」「いろいろある考え方の中のどれがもっともらしいか」と考えるようになる。遅々とした歩みではあるが，ディベートは「自分で考える」ことを間違いなく促すだろう。

■ディベートへの道のり

ディベートは，４技能の総合力が試されるものである。母語である日本語で自分の意見を表明することにも困難を要する生徒たちに，どうやってこの総合力を身につけさせることができるのか，いくつかの基本的な活動を段階的に取り入れながらディベートの準備をしていった。

(1) コミュニケーションが図れる集団作り

自分の思いや願いを表現することのできる場を作り出すことは，コミュニケーションを図る上でも非常に重要だ。そこで，一人ひとりの活動に重点をおいて個への支援を中心にしながら，ペアやグループ学習を意識的に取り入れた。

(2) 「聞くこと」の育成

聞く活動の中で，聞き取れない単語に出会うと不安を感じ，ややもすると一連の活動が停止することがある。そこで，１つひとつの語句よりも，キーワードや要点をとらえる練習をするために，英語ニュースや英語の歌の聞き取りをおこなった。

(3) 「話すこと」「書くこと」の育成

生徒が自ら話したい，書きたい，と思うような活動，たとえばShow & Tellなどを計画した。発表の際にはアイコンタクトや身振り手振りにも気を付けるよう促した。また発表を聞いた後，生徒による相互評価としてコメントを英語で書かせた。

(4) より実践を意識した活動へ

① 雨，雪，夏，冬，英語，電話などのテーマから１つを選び，「好き」か「嫌い」のどちらかで自分の考えを日本語で表現させ，意見が明確になったら英語で書かせた。

② 教師が口頭で伝えた英文に対して，生徒が応答し話しを続ける練習（例１）や，教師が伝えた内容に対して反対の意見を表しその理由を述べる練習（例２）をおこなった。また同様の活動を生徒同士（ペア）でもおこなった。

（例１）JT : Mutsai* is from America. (*ALTの名前)
ST : Oh, America is a big country. I would like to visit there some day.

（例２）JT : Japan is a good country.
ST : No, I don't think so, because it is a small country. Most people live in apartments because we don't have much lands.

■ディベートの実践

ディベートは少人数のチームが限られた時間の中で，スピーチによって論争を展開する知的なゲームである。そのポイントは次の４つにまとめられる。

①論ずる主張（論題）を，具体的に1つ決める。
②論題の肯定側と否定側の，２つの討論者（ディベーター）のチームに別れる。
③順序や時間を決めた進行ルールの下で，スピーチをする。
④試合の最後に，判定をして勝ち負けを決める。

第１は，討論する主張を具体的に１つだけ決める。これを論題という。第２に，対立する２つのチームに別れる。ディベーターの立場は，自分の意見と同じになるとは限らない。第３に，順序や時間などの発言ルールが決まっている。立論，尋問，反駁などの形式で，肯定と否定が交代しながら，同じ時間を使ってスピーチをする。立論では全体の主張を明らかにし，尋問では立論の内容について相手側に問いただして回答させ，反駁では相手側の批判に対して再反論するのである。最後に，特定の評価基準で，どちらのチームが勝ったかを判定する。審判がどう思うかの評価ではなく，論争の説得力についての評価である。従って，ディベーターは論争で相手側の弱点をつくだけでなく，自分の有利さを審判にはっきり示すスピーチをしなくてはならない。今回の実践では，意見を発表する際の意欲・態度も大きな判定基準とした。

単元名：LESSON 7, A Vulture and a Child
NEW CROWN ENGLISH SERIES 3

単元の目標：

①ディベートを通して，課題解決の方法を見いだし，主体的に解決することができる。
②人道と報道の問題点について考え，自分の考えを述べることができる。
③アフリカの現状について知り，異文化を理解し，尊重することができる。
④(want, tell, ask)＋人＋to＋動詞の原形，make＋名詞＋形容詞の表現形式を使って自分の考えを述べることができる。

この単元は，１枚の報道写真を通して，人道（ヒューマニズム）と報道のあり方について考える好題材である。論題(Topic)を“Do you agree with the photographer?”とし，３年生39名

のクラスを３つのグループに分けてディベートに挑戦した。それぞれのグループ内では「肯定側」「否定側」「司会進行」「審査員」のいずれかの役割を分担をした。

生徒は事前に，写真が撮影されたときの状況やケビン・カーターについて，またはアフリカやスーダンの状況などをインターネットなどで調べ，自分の意見を徐々に明確にしていった。この事前学習時からディベートの実践まで，一貫してJT２名，ALT１名が３つのグループにそれぞれに１人ずつ入り，生徒の活動を支援した。以下はディベートの進行フォーマットである。

①司会者による論題の確認
②肯定側立論　⑥否定側第１反駁
③否定側尋問　⑦肯定側第１反駁
④否定側立論　⑧否定側第２反駁
⑤肯定側尋問　⑨肯定側第２反駁
*審査・判定

生徒達の立論や尋問の一部を以下で紹介したい。

(1) 肯定側立論

・His photo made us happy, because we could know the facts about Sudan.
・Taking good pictures was his dream. It is important for people human to realize the dream.
・This photo helped many other starving Sudanese. They took pictures for Sudanese.

(2) 否定側尋問および肯定側反駁

・What do you think is more important than life?
反駁（以下→印で示す）Nothing is more important than life. But we have to have the job to live.
・Why didn't he give some food and water to the child before or after taking the picture ?
→Because he had nothing to give her then.
・How did the photo make Kevin good? I think he was selfish. He only wanted to be famous.
→He was a professional to take pictures. So he was not selfish. His photo made the world peace. He liked peace.
・What do you think he felt, when he was taking those pictures?
→The photo made him sad. But it was his job. I thought he wanted the world to know the facts.
・Why did he commit suicide ?
→Some of the people were against his photo. So he was very disappointed.

(3) 否定側立論

・We think life is the most important of all.
・We think Kevin had to save the child before everything.
・We will not be able to achieve world peace if we can't save only one life.
・We think that there are other ways to inform the world about peace and the Sudan, like making speeches or writing a book about Sudan etc.
・An adult should protect a child.
・He kept taking pictures in spite of the fact that she was dying. He was similar to the vulture.
・If I was the girl of the photo, I was sure I wanted him to help me then.

(4) 肯定側尋問および否定側反駁

・This textbook didn't say that he didn't do anything to help her. We may say that he saved her after taking the picture. What do you think of my

opinion?
→I have read another book about Kevin. When I read that, I realized he didn't do anything.

・I think that he would save the girl if the vulture was going to attack her. What do you think of my opinion ?
→I didn't know about it. Because this textbook didn't say anything about it.

・The vulture had to eat anything to live. It is natural that the stronger attack against the weaker.
→Yes, I agree with you. But life of human is the most important of all.

・Many people need to be helped by other people of the world. One man can't save the world. His photo focused attention to the situation in Sudan. His photo helped a lot of people all over the world. Tell me your opinion.
→An adult should protect a child. Each child has one life. So she had a life. Her life is as important as others.

（以上，原文のまま掲載している。）

ディベートの中では，少女の命の尊さ，スーダンの状況（南北問題や戦争），平和問題，報道のありかた，少女とケヴィンの気持ち，仕事と生活などをめぐって議論された。教科書のLESSON 7を元に，生徒たちはこのようなさまざまな事柄について考えを発表したことになる。最後の審査・判定では３グループのうち，２つで反対側に，そして１つで賛成側に軍配があがった。

■おわりに

以上拙い取り組みを紹介させていただいたが，生徒達の積極的でしかも生き生きとした活動ぶりには驚くばかりだった。

ディベートを始めるときの心配は，討論するディベーターの熱心さや議論のレベルではなかった。討論を聞く生徒達がまじめに聞くかどうかであった。結果をみてみると，Judgeの生徒達は実に熱心に討論を聞き，ディベーターを含めた全ての生徒の授業への集中度や緊張感が高く，講義の一斉授業より効果のあることがわかった。ディベーターはもちろん自分たちの意見が認められようと一生懸命に準備し，相手を説得しようと熱弁をふるう。つまり，生徒参加型の授業として，ディベートは大きな意義をもっていたのである。友達のまじめな議論だから面白い。教師の難しい話よりずっとわかりやすいのだ。

ディベートの実践は継続することが大切である。判定基準の明確化など課題も多く挙げられるが，これからも生徒達の「もっと話せるようになりたい」という気持ちを大切にし，積極的にコミュニケーションを図ろうとする生徒を育てるために日々の実践と研修を深めていきたい。

生徒の感想（自己評価カードから）

・僕達はすごく豊かに暮らしていて，将来の夢などを考えることができるけど，スーダンの人たちは，今日を生きるのに必死で何もできないのがかわいそうだと思った。

・いろいろな取り組みをきっかけに，私は英語を人前で話すのが好きになった。自分で一生懸命考えた英文が相手に伝わったときの喜びは何にも変えがたく，感動したからだ。

・英語とは，自分の言い表したいことをいかに簡単な文法や言葉で言い表すかがポイントだということを学んだ。

・今まで英語は難しいと思っていたが，先生の授業をきっかけに，自分でもできるという自信を持つことができ，今では国境を消せるような国際人になりたいと思っている。

・僕はこの学習で，英語での人との関わり方を学びました。そしてただ文法を覚えるだけでなく，実際に人と英語で話すことでだんだんはなせるようになるということを知りました。これからはただ英語を１つの勉強として学ぶのではなく，人と話す手段として，人と接しながら学んでいこうと思う。

◇三省堂英語教育・中学 別冊　◆2001年10月1日発行　◆編集・発行人　渡辺孝映
◆発行所 株式会社 三省堂　◆〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14　◆電話03(3230)9421
◆電子メール newcrown@sanseido-publ.co.jp　◆ホームページ http://www.sanseido-publ.co.jp/